

## 研究会報告

# 1994年度の「社会情報調査の方法に関する研究会」について

井上 芳保

昨年度からスタートした「社会情報調査の方法に関する研究会」は「社会情報調査」という新しい学問の方法についてさまざまな角度から検討していこうとするものである。今年度も昨年度と同様、学外から若手研究者をお招きし、第3回、第4回と二回の研究会を開催することができた。両研究会は、いずれも学内だけでなく他大学からの参加者を得て行われ、質疑応答も活発にあって大いに盛り上がり、意義深いものとなった。

\*

\*

第3回は、7月28日、高橋和子さん（千葉敬愛短期大学講師）をお招きして「非定型データの分析方法について」というテーマで行われた。アンケート調査を行う際に設問に選択肢を設けることが多い。それは数値化して処理しやすく、普遍性志向を有したデータベース化しての利用に向いている。しかし、限られた選択肢のどれかに自分の意見をはめこむ過程で、どうしても或る種の歪みが生ずる可能性は否定できない。調査する側の都合で勝手に対象者を或る枠組みにはめこんでおきながら、そのことに無自覚であっては実証の名に値しない。いくら精密な技法を駆使しても、もともとのデータの性格についての基本的認識を誤ったり、或いは何のためにデータを加工処理しているのかわからなくなるのでは社会科学としては自殺行為である。これに対して、自由回答法を使う分析の際に我々は回答してくれる相手個々の具体的多様性に対して常に注意深くなる。これは大きなメリットであるといえよう。

調査テーマが何であれ、社会情報調査（実習）とは、フィールドワークを行うことによってできるだけ高い客観性を得ようとするものである。高橋さんは選択肢を設けずに回答者に記入してもらった自由回答データの方に限られた選択肢から選んでもらうデータよりも高い客観性を認める観点に立っている。従来、数値化して処理しにくかったものを何とか数値化できないかという点に高橋さんの問題関心は向いている。高橋さんはこのテーマでの発表を過去に数理社会学会の場でされており、専門分野で高い評価を得ている。実証の精度は社会科学である以上、できるだけ高める必要があるのに、これまで自由回答データの分析方法はあまり関心の対象となつてこなかったといえる。高橋さんの試みはそのような意味で「エスノメソロジーの必要性と可能性」を主題として行われた第2回の研究会と同様に、たいへん注目に値するものである。

今回、以下に掲載する高橋論文「非定型データの処理・分析について——自由回答を中心に」はその際の報告内容をもとに書き下ろして寄稿していただいたものである。たいへん興味深いお仕事を本誌のためにお寄せいただいたことに心から感謝したい。

第4回は、10月7日、吉見俊哉さん(東京大学社会情報研究所助教授)をお招きして、「運動会の思想——国民祭典論のための序論的考察」というテーマで行われた。学校行事である運動会という極めて日常的なイベントに着目して、「明治日本」という近代国家に適合的な意識と身体技法を有する存在としての「日本国民」が生成されていく過程を吉見さんは職人芸的な鮮やかな手さばきで浮かび上がらせた。むろん問題は「明治日本」だけのものではあるまい。匿名化した権力と支配を明らかにする考察は、情報社会といわれる「現代日本」にも適用されるべきものといえよう。

吉見報告は、情報社会学の分野で昨今、活況を呈している、いわゆるカルチャル・スタディズのお手本のような報告であった。しかし、内容的に考えるとこれは本来、教育社会学の領域を専門とする研究者がなさねばならぬテーマといえる。吉見さんは、明治期の社会に焦点をあてる必要から運動会というイベントに一つの素材としての関心を持たれたようであるが、戦後の「民主的な」社会における運動会の社会的機能の分析は教育社会学の研究者が引き継ぐべき課題として残っているように思われる。身体に関わる教育的なイベントはこの他にも多い。例えば「高校野球」などはその恰好のテキストとなろう。

吉見さんの今回の報告は直接、方法論を扱ったものではない。しかし、社会情報調査というものの未踏の、大きく広い可能性の一端について開示して下さったという意味からしてもたいへん貴重な研究会となったといえる。直接的に方法論というより、テーマや着眼点のユニークさという観点からも今後のこの研究会は企画されるべきだろう。

なお、今回の吉見報告もぜひ論文として本誌に掲載したいと我々は考えていたのであるが、昨秋の『思想』11月号(特集：近代の文法)に「運動会の思想——明治日本と祝祭文化」というタイトルで載った吉見論文が、ほぼそっくりこの研究会の報告内容である。また、吉見さんは本研究会の翌日の10月8日、北海道大学思想史研究会主催のシンポジウム「天皇制をめぐる」においても「明治日本と国民祭典——天皇巡幸、帝都形成から博覧会、運動会まで」という報告をされた。この報告のレジュメは同研究会に問い合わせれば入手できる。興味を持たれた方は、ぜひそれらを参照していただきたい。

\*

\*

「社会情報調査の方法に関する研究会」は今後も年二回のペースで開催していきたいと考えている。学部の皆様の一層のご支援、ご協力をお願いしたい。